



文部科学省 研究公正推進事業

研究公正シンポジウム

責任ある研究・イノベーション の展開に向けて

抄録集

令和5年**11月17日(金)**

11:00~15:45

Zoom入室
10:40

主催



国立研究開発法人 日本医療研究開発機構
Japan Agency for Medical Research and Development

共催

独立行政法人日本学術振興会 (JSPS)
国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST)
国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO)
国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構生物系特定産業技術研究支援センター (BRAIN)

文部科学省 研究公正推進事業

研究公正シンポジウム

責任ある研究・イノベーション の展開に向けて

〈目 次〉

主催者挨拶	
三島 良直 国立研究開発法人日本医療研究開発機構 理事長	4
来賓挨拶	
岡村 勝文 文部科学省 科学技術・学術政策局 研究環境課 研究公正推進室 室長	5
基調講演	
■「新しく出現する科学技術にどう取り組むべきか? -ライフサイエンスを題材にして考える-」 徳島大学 副学長 菱山 豊	6
パネルディスカッション1	
【テーマ】社会との対話を通じた「責任ある研究活動」の推進 ―医療分野の研究開発の事例から― 座長:東北大学 大学院文学研究科 准教授 田代 志門	7
■「臨床研究の民主化を目指して ～患者、市民の立場から～」 一般社団法人CSRプロジェクト 代表理事 桜井 なおみ	8
■「専門家と一般市民のコミュニケーションの課題 ～医学系研究をわかりやすく伝える手引きの作成から～」 埼玉県立大学 保健医療福祉学部 准教授 山田 恵子	9
■「日本再生医療学会による社会との連携を目指した活動」 藤田医科大学 橋渡し研究支援人材統合教育・育成センター 教授 八代 嘉美	10
■「共創社会の涵養:北海道大学病院におけるPPIと社会共創の実践」 北海道大学病院 医療・ヘルスサイエンス研究開発機構 臨床研究開発センター 臨床研究支援部門 センター長補佐・特任講師 渡邊 祐介	11
パネルディスカッション2	
【テーマ】最先端の研究開発を支える研究公正・研究倫理教育のあり方 ―「責任ある研究・イノベーション(RRI)」による研究推進に向けて― 座長:千葉大学 国際学術研究院 准教授 東島 仁	12
■「総合大学におけるRRIとELSIの取り組み～実践例より～」 東京大学 役員室 理事・副学長 藤垣 裕子	13
■「東京工業大学における研究公正と社会共創への取り組み」 国立研究開発法人日本医療研究開発機構 理事長 三島 良直	14
■「人文・社会科学系の研究者の立場から」 早稲田大学 社会科学部 准教授 横野 恵	15
■「PPI(Patient and Public Involvement)が牽引する医学研究RRI (Responsible Research and Innovation)のフレームワーク」 東京医科歯科大学 生命倫理研究センター 教授・センター長 吉田 雅幸	16

タイムスケジュール

令和5年11月17日(金) 11:00～15:45

Zoom入室
10:40

11:00-11:05	主催者挨拶 三島 良直 国立研究開発法人日本医療研究開発機構 理事長
11:05-11:10	来賓挨拶 岡村 勝文 文部科学省 科学技術・学術政策局 研究環境課 研究公正推進室 室長
11:10-12:00	基調講演 「新しく出現する科学技術にどう取り組むべきか? -ライフサイエンスを題材にして考える-」 菱山 豊 徳島大学 副学長
12:00-13:00	休憩 国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)「倫理の空白」 動画上映(2本)
13:00-14:20	パネルディスカッション1 テーマ 社会との対話を通じた「責任ある研究活動」の推進 ―医療分野の研究開発の事例から― 座長:田代 志門 東北大学 大学院文学研究科 准教授 パネリスト: ■「臨床研究の民主化を目指して ～患者、市民の立場から～」 桜井 なおみ 一般社団法人CSRプロジェクト 代表理事 ■「専門家と一般市民のコミュニケーションの課題 ～医学系研究をわかりやすく伝える手引きの作成から～」 山田 恵子 埼玉県立大学 保健医療福祉学部 准教授 ■「日本再生医療学会による社会との連携を目指した活動」 八代 嘉美 藤田医科大学 橋渡し研究支援人材統合教育・育成センター 教授 ■「共創社会の涵養:北海道大学病院におけるPPIと社会共創の実践」 渡邊 祐介 北海道大学病院 医療・ヘルスサイエンス研究開発機構 臨床研究開発センター 臨床研究支援部門 センター長補佐・特任講師
14:20-14:25	休憩 ～研究公正に関する教材等の紹介スライドショー～
14:25-15:45	パネルディスカッション2 テーマ 最先端の研究開発を支える研究公正・研究倫理教育のあり方 ―「責任ある研究・イノベーション(RRI)」による研究推進に向けて― 座長:東島 仁 千葉大学 国際学術研究院 准教授 パネリスト: ■「総合大学におけるRRIとELSIの取り組み ～実践例より～」 藤垣 裕子 東京大学 役員室 理事・副学長 ■「東京工業大学における研究公正と社会共創への取り組み」 三島 良直 国立研究開発法人日本医療研究開発機構 理事長 ■「人文・社会科学系の研究者の立場から」 横野 恵 早稲田大学 社会科学部 准教授 ■「PPI(Patient and Public Involvement)が牽引する 医学研究RRI(Responsible Research and Innovation)のフレームワーク」 吉田 雅幸 東京医科歯科大学 生命倫理研究センター 教授・センター長

ご挨拶

三島 良直

国立研究開発法人日本医療研究開発機構 理事長



このたび、文部科学省研究公正推進事業の2023年度研究公正シンポジウムを開催いたします。今回のテーマは、「責任ある研究・イノベーションの展開に向けて」です。参加いただいている皆さま方におかれましては、大変ご多忙のところ、本シンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございます。

本シンポジウムは、今回で7回目の開催となり、これまで研究不正を防止するための研究倫理教育や研究機関等が取り組むべき事項等について様々な議論が行われてきました。このような教育や取組は、研究不正防止のみならず、責任ある研究活動により、よき研究者を育て、優れた研究成果をあげるためにも必要なものと考えられます。

一方、近年欧州では、「責任ある研究・イノベーション」(RRI: Responsible Research and Innovation)という考え方が掲げられています。RRIとは、一般市民や様々なステークホルダーとともに、倫理的に受け入れられ、持続可能で、社会的に望ましい研究とイノベーションの成果を生み出すことを目指すという考え方です。これは、日本学術会議の「科学者の行動規範」(平成25年1月改訂)に科学者の責務として掲げられている「社会との対話」、すなわち社会と科学者コミュニティとのより良い相互理解のために、市民との対話と交流に積極的に参加することにも合致するところです。

本シンポジウムにより、基調講演を通じてRRIの重要性に係る関係者の共通理解が促進されるとともに、2つのパネルディスカッションを通じて、社会との対話を通じた「責任ある研究活動」の推進や、最先端の研究開発を支える研究公正・研究倫理教育の在り方について、研究コミュニティ全体で考える契機が得られることを期待しております。

ご挨拶

岡村 勝文

文部科学省 科学技術・学術政策局 研究環境課 研究公正推進室 室長

略 歴

文部科学省研究振興局ライフサイエンス課ゲノム科学係長、OECD/NEA エキスパート、在クロアチア日本大使館二等書記官、原子力規制庁核物質防護室長補佐、岩手大学研究交流部研究推進課長、文部科学省初等中等教育局教育課程課専門官、日本医療研究開発機構基盤研究事業部バイオバンク課長、デジタル庁国民向けサービスG 参事官補佐等を経て、令和5年5月より現職。



文部科学省では、平成26年8月に「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」を策定し、研究者個人のみならず、大学等の研究機関が責任を持って不正行為の防止に関わる取り組みを進めるとともに、不正行為を防止するための研究倫理教育の実施等の取り組みを推進しています。これは、研究活動における不正行為への対応は、研究者自らの規律や研究機関、科学コミュニティの自律に基づく自浄作用によるべきものである、との基本認識を踏襲した上で、研究者自身の規律や科学コミュニティの自律を基本としながらも、研究機関が責任を持って不正行為の防止に関わることにより、対応の強化を図ることを基本的な方針としたものです。

挨拶では、平成26年のガイドライン策定後を中心に、研究機関における研究倫理教育の状況や、近年の研究不正の認定状況等について、簡単にご紹介させていただくこととしておりますが、各研究機関の皆様におかれましては、公正な研究の推進に向け、引き続き、ご支援、ご尽力の程宜しく願い申し上げます。

新しく出現する科学技術にどう取り組むべきか？ -ライフサイエンスを題材にして考える-

菱山 豊

徳島大学 副学長

略 歴

1985年東京大学医学部保健学科を卒業し、科学技術庁入庁。2001年以降、文部科学省で、ヒトゲノム、ヒトES細胞等の倫理指針の作成等の生命倫理政策、iPS細胞等再生医療、脳科学、橋渡し支援などのライフサイエンス研究政策、内閣官房においてAMEDの設立作業、AMEDに出向し、立ち上げ作業と医学研究の推進等に携わった。その後、文部科学省科学技術・学術政策局長、科学技術・学術政策研究所長を務め、2021年から現職。その他、JST、日本学術会議にも出向。



専門領域

科学技術政策 生命倫理

要 旨

大学や研究所では日々研究が行われ、新しい科学や技術が生み出される。その中には、社会的に影響が大きいものもあれば、そもそも研究を行ってよいかどうかを考えなければならないものもあるだろう。こうした問題は、「倫理的・法的・社会的課題(ELSI)」と呼ばれ、この30年間ほど検討が行われてきているが、その範囲は拡大している。また、近年、「責任ある研究・イノベーション(RRI)」という考え方も提唱されている。本講演では、ELSIが注目されてからのライフサイエンスにおける政策面からの対応を中心に紹介し、新しく出現する科学技術に私たちはどのように取り組むべきかを考えたい。

ELSIはヒトゲノム研究を契機に現れたが、社会的に影響が大きい科学技術はそれ以前から出現していた。例えば、遺伝子組換え技術について、科学者が集まって検討して、ルールを検討したことは有名である。人類は様々な科学技術への対応の経験を積み上げており、歴史に学ぶことは重要である。ヒトゲノム解析に加え、ヒトES細胞やクローン技術などへの対応を振り返ってみる。また、新たな科学技術の例として、動物の体内にヒトの臓器を作る技術やゲノム編集等を取り上げて、どのような対応が適切であるかを考えてみたい。

医学研究を倫理的に正しく、そして責任を持って行うための仕組みの一つとして、倫理審査委員会が考え出された。医学研究を実施する大学や研究所において、倫理審査委員会において審議が行われることは当然となっているが、「倫理がラボにやってきた」のはそう遠い昔のことではない。また、捏造、改ざん、盗用などの研究不正は、非倫理的で無責任な対応ということになる。

医学研究においては、患者等が研究の対象となるため、研究対象者の保護の観点から同意(インフォームド・コンセント)を得ることが必要であった。最近では、研究の対象という位置づけから、研究への参加、あるいは研究計画作成への参加など、患者や市民の「エンゲージメント」が課題となっている。研究を実施する側でも、このような状況に対応するための専門家が必要となってくる。海外に目を転じると、科学技術に関する問題は他の国においても発生することがほとんどであり、国際機関の場で検討されることが多い。演者が経験した例を取り上げ、海外の政策担当者も対応に苦慮していることを述べる。

EUによると「RRIは、倫理的に受け入れられ、持続可能で社会的に望ましい研究とイノベーションの成果を生み出すために、科学とイノベーションの分野に公衆と責任ある関係者を関与させることを目指す。」とされており、目指すべき社会像や価値観から逆算するというような対象を絞ることはしていないことに注意。新しく出現する科学技術に対応する基本的な態度としては適切であろうが、何故このような概念を使うのか、日本としてどのように対応するのか、そして、個別の科学技術に対して、どう具体化するのかを考えることが重要であろう。

パネルディスカッション1

社会との対話を通じた「責任ある研究活動」の推進

—医療分野の研究開発の事例から—

研究開発は、社会の信頼と負託の上に成り立っており、研究成果の社会実装に当たっては「責任ある研究活動(RCR: Responsible Conduct of Research)」が重要です。この責任ある研究活動の取組の1つが、社会との対話です。1999年の世界科学会議の「科学と科学的知識の利用に関する世界宣言」(ブダペスト宣言)では、「社会の中の科学、社会のための科学(Science in society and science for society)」が言及されており、2013年の日本学術会議の声明「科学者の行動規範-改訂版-」においても、「科学者は社会と科学者コミュニティとのより良い相互理解のために、市民との対話と交流に積極的に参加する」と指摘されています。

パネルディスカッション1では、社会との対話を通じた「責任ある研究活動」の推進について、医療分野の研究開発の事例を中心に取り上げ、理解を深め、議論を展開します。社会との対話により、研究活動に研究者以外の「知」を取り入れることで、学問の多様性がより豊かになるだけでなく、研究の適正性・倫理性の向上も期待することができます。

本パネルディスカッションを通じて、参加者全員で社会との対話の意義や重要性を改めて確認するとともに、対話を「責任ある研究活動」につなげるために研究者や研究機関はどのような取組が可能なのかについて、考える手がかりを共に探す契機になればと思います。

座 長

田代 志門

東北大学 大学院文学研究科 准教授

略 歴

2007年、東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。東京大学特任助教、昭和大学講師、国立がん研究センター生命倫理部長を経て、現在、東北大学大学院文学研究科准教授。日本社会学会理事、日本保健医療社会学会理事。著書に『研究倫理とは何か——臨床医学研究と生命倫理』(勁草書房、2011年)、『死にゆく過程を生きる——終末期がん患者の経験の社会学』(世界思想社、2016年)など。

専門領域

社会学、生命倫理学



臨床研究の民主化を目指して ～患者、市民の立場から～

桜井 なおみ

一般社団法人CSRプロジェクト 代表理事



略 歴

大学で都市計画を学んだ後、卒業後はコンサルティング会社にてまちづくりや環境教育、費用対効果などの業務に従事。がん罹患後は、働き盛りで罹患した自らのがん経験や社会経験を活かし、小児がんを含めた患者・家族の支援活動を開始、現在に至る。一般社団法人CSRプロジェクト代表理事、がんサバイバルネットワーク代表取締役社長、として活動。技術士(建設部門)、社会福祉士、精神保健福祉士、産業カウンセラー。

専門領域

患者・市民参画、当事者研究、患者会活動

講演

イノベーションとは何か？筆者の考えでは、「飛躍的に」治療成績を改善するだけではなく、患者、あるいは家族の生活の質(QOL)やその量(QQOL)をも担保されたものと期待したい。

昨今の医療技術の進歩は、今まで治療困難であった幾つかの疾患において、その生命予後を大きく改善した。学術集会や論文でも、今まで見たことがなかったような統計的な数値やグラフをみるようになった。こうした最先端の医療技術の恩恵を私たち患者は受けてきており、技術革新を実感もしている。

しかしながら、疾病とは疎遠な市民では、その恩恵を直接享受する機会は少なく、「自分事化」しにくいのも現状である。市販薬も含め、今ある治療は、過去の多くの被験者、研究者など関係者のたゆみない努力によって創られてきたものである。「自分事化」しづらい背景要因として、「難しい科学の仕組みを優しい言葉で市民に分かりやすく語り掛けていく」機会が少なかったことなどもある。

医療は多くの税金が投入された「公共財」である。特に今後の薬剤開発は、身体が本来備えていた仕組みの応用など、身体より深い部分に作用する細胞療法や遺伝子治療などが登場することも期待されており、開発コストを含めた高額化も懸念されている。したがって、その開発・研究プロセスにはこれまで以上の説明責任や、プロセスの透明化が社会から要請されていく。本セッションでは、患者の視点から見たこれまでの歩みを振り返りつつ、今後への期待と懸念について述べていきたい。

専門家と一般市民のコミュニケーションの課題 ～医学系研究をわかりやすく伝える手引きの作成から～

山田 恵子

埼玉県立大学 保健医療福祉学部 准教授



略 歴

東京大学医学部卒。都内整形外科・救急科勤務を経て、東京医科歯科大学大学院医療管理政策学修了。ダナファーマーヘルスコミュニケーション教室留学後、東大病院整形外科、東大医療情報経済学客員研究員。ハーバード大学公衆衛生学大学院留学、東大病院企画情報運営部を経て現職。整形外科専門医、博士(医学)、修士(公衆衛生学、医療政策学)。情報サイト All About 女性の健康ガイド(2001年～現在)。

専門領域

整形外科学、ヘルスコミュニケーション学、疫学、医療情報学、リハビリテーション学

講演

COVID-19のパンデミックでは、医学的研究への社会的課題や関心が高まり、インターネット等で大量の医療情報が氾濫しました。しかし、医学系研究を理解するには、用語の難解さや、研究を理解するための知識が一般的でないことなど様々な問題があります。また、研究者が自分の研究を一般に向けて発信するための日本語の手引きがないことが問題となりました。そこで我々は、医学系研究者が科学的な根拠に基づき正しく情報を発信するための手引きを作成しました。

手引きは「用語以外の問題」と「用語」で構成しています。「用語以外の問題」はいわゆる「サイエンスコミュニケーション」とよばれる基礎編と、医学研究に特徴的な「実践編」に分けて構成し、注意点をチェックポイントとしてまとめました。作成に当たり、医学・健康分野における国内外の文献レビューを行いました。日本語での検討が少ないことが問題となりました。

また、用語は新聞記事や専門記事等をデータベース化し、統計・言語学的手法から重要用語を抽出しました。さらに、一般の方、専門家双方へのアンケートの結果を踏まえた上で、解説と具体的な言い換えを提案しました。用語の問題で特徴的であったことは、用語自体が難解であることに加え、専門家と一般の方の受け取り方が異なる用語が存在することでした。

本手引きにとって最も重要なことは、手引きが実地に使用され、専門家、一般双方の現場の声を受けて改善されてゆくことだと考えています。今回我々が行ったのは医学系研究を伝えるための工夫ですが、おそらく他の専門分野でも同じ構造的な問題があると考えていますので、本発表が何らかの参考になれば幸いです。

参考 ウェブサイト

医療情報をわかりやすく発信するプロジェクト
<https://ez2understand.ifi.u-tokyo.ac.jp/>

日本再生医療学会による 社会との連携を目指した活動

八代 嘉美

藤田医科大学 橋渡し研究支援人材統合教育・育成センター 教授



略 歴

2004年名城大学薬学部薬学科卒業。2009年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了。慶應義塾大学医学部生理学教室特任助教、東京女子医科大学先端生命医科学研究所特任講師、京都大学iPS細胞研究所特定准教授、神奈川県立保健福祉大学を経て2023年より現職。2022年より慶應義塾大学殿町先端研究教育連携スクエア特任教授も兼任。羽田・殿町地域の再生医療・細胞治療のエコシステム形成にも携わっている。

専門領域

幹細胞生物学、科学技術社会論

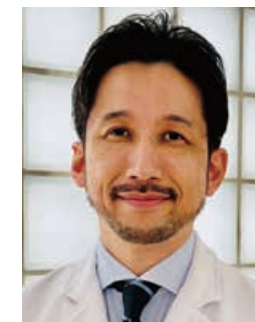
講演

我が国では2013年に「再生医療を国民が迅速かつ安全に受けられるようにするための施策の総合的な推進に関する法律（再生医療推進法）」が交付されて以来、国全体での研究・社会実装の推進が推し進められてきた。その結果、ヒトiPS細胞の臨床研究が開始され、さまざまなシーズの治験も実施されるなど実際に人間へと移植をするという実践的な段階でのELSIの重要性が増大している。再生医療以外の先端医療においても指摘されてきたさまざまな問題であり、患者・被験者の権利・身体をどのようにして保護するのか、という問題が含まれている。患者の過剰な期待を煽るような情報発信や、社会からの期待を逆手に取るかのような、市中のクリニックにおける行為への危惧は長年に渡って指摘されているが、再生医療という単語が社会に浸透することによって、かえって患者・消費者を誘引するマジックワードとしての働きも高まっている。本発表では、このような状況に対して、適切な社会理解・社会受容を構築し、科学的・倫理的に適切な再生医療の実用化に資するため、日本再生医療学会がこれまで実施してきた患者や非専門家とともに医療研究をつくりあげていく「患者・市民参画（PPI）」の取り組みについて述べる。

共創社会の涵養： 北海道大学病院におけるPPIと社会共創の実践

渡邊 祐介

北海道大学病院 医療・ヘルスサイエンス研究開発機構
臨床研究開発センター 臨床研究支援部門 センター長補佐・特任講師



略 歴

医学博士。医師として診療・研究に従事しながら、研究開発支援の役割を担う。カナダMcGill大学留学時代に患者中心アウトカム（Patient-Centered Outcomes：PCO）などの研究に携わる。研究開発や研究規制に係る行政経験を経て、2019年より現職。現職では、研究立案や薬事対応等の研究開発支援に加え、医療機器やAI・Dx関連の研究開発に取り組む。北海道大学病院PPIプロジェクトの中心メンバーで、機構プロモーションユニットの広報委員長を務める。

専門領域

外科学一般、消化器外科学 / 臨床研究、医学教育、医療技術開発

講演

患者市民参画（PPI）および社会共創は、医療分野の研究開発において重要な役割を果たす。我々は、橋渡し研究支援機関における北海道大学拠点の中心的組織として、また臨床研究中核病院として、PPIおよび広報活動を通じて社会共創に注力してきた。特に、研究開発における社会共創を推し進めるため、協働実績を有する学外有識者や一般の方々とPPIプロジェクトチームを編成し、活動基盤の整備に取り組んできた。患者市民との対面による協働に向け、非医療系職員を対象にPPIワークショップを試行し、準備を進めてきた。広報活動では、地域との交流を重要視し、職業紹介を通じた治験・臨床研究の啓発、コラボレーションによる情報発信を行ってきた。道内中高生を対象とした職業情報誌を通じた治験・臨床研究の専門職の紹介は、近隣中学校での職業講話（キャリア学習）へ発展している。職業講話は専門職の紹介が中心であるが、橋渡し研究支援機関や臨床研究中核病院、PPIを紹介する時間としても活用している。これらの経験は、現在、学生・研修医教育にも活かされている。健康・医療に対する無関心層へはアーティストとのコラボレーションによる情報発信を行い、学祭展示や学祭での講話などで地域住民との双方向コミュニケーションを図っている。社会共創活動は業務負荷や予算の制約といった障壁に直面することもあるが、既存スキームの活用、そして地域住民でもある職員のアイデアを取り入れながら活動を行っている。地域へのアウトリーチや地域との共創を推進できるよう、職員・学生の共創意識の醸成を大切にしている。ここでは、我々の取組みに加え、現状の課題や今後の展望について共有する。

参考 ウェブサイト

北海道大学病院 医療・ヘルスサイエンス研究開発機構
<https://helios.huhp.hokudai.ac.jp/news/>

パネルディスカッション2

最先端の研究開発を支える研究公正・研究倫理教育のあり方

—「責任ある研究・イノベーション(RRI)」による研究推進に向けて—

これまでの本シンポジウムでは、研究不正への対応を中心として、分野ごとの特色や作法を踏まえた研究倫理教育や研究機関が取り組むべき事項等について議論を深めてきました。さらなる研究開発の展開に向けて、パネルディスカッション2では、さまざまな学問分野・領域の融合(異分野融合)をもって最先端の研究開発が進められようとするなか、その研究開発を支える研究公正・研究倫理教育のあり方について理解を深め、議論を展開します。

第6期科学技術・イノベーション基本計画(令和3年3月26日閣議決定)では、「新たな社会を設計し、その社会で新たな価値創造を進めていくためには、多様な『知』が必要である」とされるなど、総合知を活用した課題解決やイノベーション創出がますます重視されており、分野を横断する学際研究等への期待が高まっています。学問分野・領域ごとの特色等を踏まえた上で、研究開発を「責任ある研究・イノベーション(RRI: Responsible Research and Innovation)」として展開していくには、どのような視点や取組が重要になるでしょうか。

本パネルディスカッションを通じて、さまざまな領域における研究公正や研究倫理教育の対応状況や考え方を参加者全体で共有するとともに、「責任ある研究・イノベーション」につなげるために研究者や研究機関はどのような研究公正・研究倫理に関する取組が可能なのか、考える手がかりを共に探す契機になればと思います。

座長

東島 仁

千葉大学 国際学術研究院 准教授

略歴

京都大学大学院生命科学研究科修了。博士(生命科学)。金沢大学大学院教育開発・支援センター博士研究員、日本学術振興会特別研究員PD(大阪大学)、信州大学医学部 CITI Japan プロジェクト助教(特定雇用)、山口大学国際総合科学部講師/准教授を経て現職。

専門領域

科学コミュニケーション、研究公正、科学技術社会論、ELSI



講演

総合大学におけるRRIとELSIの取り組み ～実践例より～

藤垣 裕子

東京大学 役員室 理事・副学長



略歴

1985年東京大学教養学部卒、1990年総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。東京大学助手、科学技術政策研究所主任研究官、東京大学総合文化研究科准教授を経て、2010年教授。2015-2016年総合文化研究科副研究科長、2021年より東京大学理事・副学長。2013-2016年科学技術社会論学会会長。著書に『専門知と公共性——科学技術社会論の構築にむけて』『科学者の社会的責任』など。

専門領域

科学技術社会論、科学計量学

講演

研究倫理や研究不正というと、我々はどうしても「*してはいけない」という「べからず集」を思い起こしてしまう。しかし、研究倫理とは、そもそも研究活動の成果が社会のなかにどう埋め込まれていくのかを考えてこそ生まれるものである。「べからず集」ではなく、より広い視野から研究活動をとらえたとき、はじめて「やってはいけない」ことがわかる、その視野を提供するのがRRI(Responsible Research & Innovation: 責任ある研究・イノベーション)であり、ELSIである。

東京大学では、藤井総長のU-Tokyo Compass目標1-5および第4期中期目標・中期計画の8-4で責任ある研究・イノベーションの推進を掲げている。この2つに共通の指標として、「RRI及びELSIを組み込んだ研究倫理セミナーを開催: 年40回」という数値指標がある。すでにセミナーは各部局で開催実績があるが、「RRIおよびELSIを組み込んだ」という形容詞をどう組み込んでいくかが肝要である。そのために、まず2022年9月の全学研究倫理セミナーでRRIについて概要を説明し、量子コンピュータ、生命科学および医療、人文社会科学、工学の各分野におけるRRIとELSIを具体的事例で解説した。その後11月に部局の研究倫理担当者を集めて「部局内セミナーでのRRIおよびELSI組み込み」の依頼をおこない、翌年2～3月に部局ごとの「組み込み事例」の発表会をおこなった(44部局)。この部局発表会でのよい実践例を、さらに2023年9月の全学研究倫理セミナーで共有する。本報告では、これら一連の試みを紹介する。

参考
ウェブサイト

UTokyo Compass
<https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/utokyo-compass.html>
令和4年度研究倫理セミナー
https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/articles/t_z0705_00003.html

東京工業大学における研究公正と社会共創への取り組み

三島 良直

国立研究開発法人日本医療研究開発機構 理事長



略 歴

1975 東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了
1979 カリフォルニア大学バークレー校大学院博士課程修了、Ph.D
1981 東京工業大学精密工学研究所助手
1989 同 助教授
1997 東京工業大学大学院総合理工学研究科教授
2006 同 大学院総合理工学研究科長(2010年3月まで)
2011 東京工業大学理事・副学長
2012 同 学長(2018年3月まで)
2019 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構技術戦略研究センター長
2020 国立研究開発法人日本医療研究開発機構理事長(現在に至る)

専門領域

材料工学、構造材料、耐熱金属材料、金属間化合物、熱電材料、組織と特性

講演

東京工業大学(以後東工大)は、公正かつ信頼に足る研究活動の確保と学術研究のさらなる進展への寄与を目的として、研究者及びこれを支援する者に係る行動規範、「東京工業大学における研究者等の行動規範」を平成20年11月に制定、同25年8月に改訂して来しました。その規範の対象者となる研究者は、東工大に所属する又は大学名を冠した肩書きを使用して研究活動を行うすべての者(常勤、非常勤、学生等の身分及び特任教授、客員研究員、RA、産学官連携研究員等の呼称も問わない。また、資金の主たる受給者であるかどうかも問わない。)としています。規範の項目は、Ⅰ. 研究者の責務、Ⅱ. 公正な研究、Ⅲ. 社会の中の科学、Ⅳ. 法令の遵守などであり、より詳細には参考ウェブサイトをご覧ください。そしてこの行動規範をわきまえた上で、東工大は科学技術系大学にとって必須の社会共創活動の一つとして2018年に未来社会DESIGN[※]機構(DLab)を立ち上げました。DLabではこれからの科学・技術の発展などから予測可能な未来とはちがう「人々が望む未来社会とは何か」を、社会と一緒に考えてデザインするための組織です。そして導き出された未来社会像を実現するために必要な要素(技術、政策など)を含めて広く社会のみなさまと共有し、共に実現に向けた活動を行うことで社会に貢献することを目指します。DLabのURLは参考ウェブサイトに示しますが、具体的な活動についてはその要点について当日で紹介します。

※DESIGN: Laboratory for DDesign of Social Innovation in Global Networks

参考ウェブサイト

東京工業大学における研究者等の行動規範
<https://www.titech.ac.jp/0/pdf/82-koudou-201308.pdf>
DLab
<https://www.dlab.titech.ac.jp/>

人文・社会科学系の研究者の立場から

横野 恵

早稲田大学 社会科学部 准教授



略 歴

早稲田大学法学部卒業、同大学院法学研究科、早稲田大学法学部助手、早稲田大学社会科学部専任講師を経て、2011年より現職。
主にゲノム研究・ゲノム医療や医療・医学研究における個人データの活用に関わるELSI(倫理的・法的・社会的課題)の研究に取り組んでいる。
現在、生命倫理専門調査会(内閣府)、健康・医療データ活用基盤協議会(内閣府)、日本医学会出生前検査認証制度等運営委員会等の委員を務める。

専門領域

医事法、英米法、ELSI

講演

医学系研究に関しては、近年、法律や倫理指針などの規制環境の頻繁な変化や、患者・市民参画(PPI)の推進など、研究公正・研究倫理、ひいては研究に対する社会的信頼の確保の観点から要請される取り組みの増加・多様化が生じている。

これらへの対応には、専門的な知識や経験が必要とされる場合も多く、業務負担の面でも医学系の研究者だけで担うことは現実的でない。また、人文・社会科学系の研究者にとって検討対象となしうる新たな課題を提起するものでもある。

本演題では、これまでヒトゲノム研究の領域を中心に、医学系の比較的大規模な研究に人文・社会科学系の専門家として参加してきた演者の経験を踏まえ、こうした活動への参画が人文・社会科学系の研究者にとってもちうる意義や研究公正・研究倫理を支えるための多様な専門知のあり方について検討する。

参考ウェブサイト

イノベーションを支えるデータ倫理規範の形成
<https://dataethics.jp/>

吉田 雅幸



Dr. Toshihiro Kikuchi is a portrait of a middle-aged man with dark, wavy hair, wearing a dark suit, white shirt, and blue tie. He is looking directly at the camera with a slight smile.

1988年 東京医科歯科大学医学部医学科卒業
1991年 九州大学生体防御医学研究所研修生
1992年 ハーバード大学医学部客員研究員
1996年 東京医科歯科大学 難治疾患研究所 助手
2002年 同 助教授
2010年 東京医科歯科大学先進倫理医学分野教授・生命倫理研究センター長
2011年 東京医科歯科大学生命倫理研究センター長・遺伝子診療科科長

遺伝子医療、研究倫理、臨床倫理、動脈硬化症

科学技術の急速な進歩は、特に医学研究の領域で目覚ましく、地球規模での研究展開が人類に様々な恩恵をもたらしている。同時に、科学技術の進展がもたらす社会的影響もまた地球規模の課題となっている。「社会における科学と社会のための科学」というブダペスト宣言の理念を体現すべく、あるべき社会の姿からデマンド・プルに研究開発の実践を行う姿勢（RRI）が今求められている。

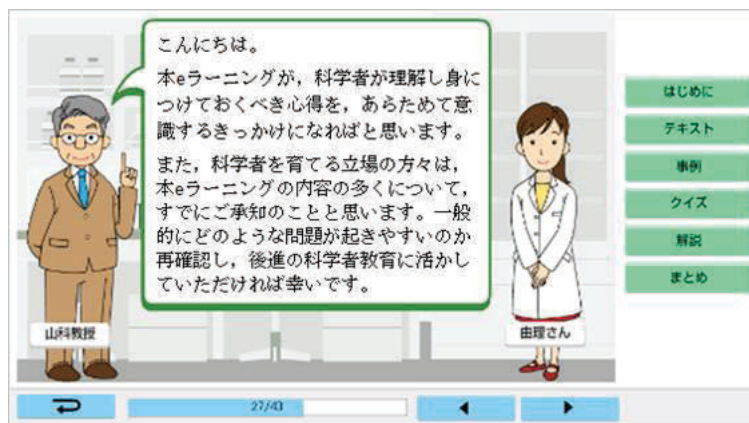
このパネルディスカッションでは、これからの医学研究のフレームワークとして、そこに関わる様々なステークホルダー（行政・企業・研究者・患者・市民）と関わるべき段階（研究の着想・資金獲得・計画立案・倫理的妥当性の検証・研究の実施・結果の公表と社会実装）の多様性・包摂性を念頭においた、「患者・市民参画」の実践について我々の取り組みを紹介しつつ、その延長線上にはどのような医学研究が構想されるのかについて議論したい。

独立行政法人 日本学術振興会 研究倫理eラーニング [eL CoRE]

■「事例」ベースのストーリー設計

グリーンブックを元に、誰もが陥りやすい事例を取り上げています。
「やってはならないこと」と「より好ましいこと」を分かりやすく理解できる、アニメーションをメインとした、事例で学び、考える教材です。

コンテンツイメージ



グリーンブックを元に事例を作成！



「日本学術振興会『科学の健全な発展のために』編集委員会編『科学の健全な発展のために－誠実な科学者の心得－』丸善出版株式会社、2015年3月」

■着実に「身に付ける」全体設計

読み飛ばしを防ぎながら、自身のペースで学習を進められる制御機能を採用しました。平均所要時間は約90分。各章末に理解度テストを設置し、分かった気になることを避け、要点を受講者に明解に伝えます。修了後は、修了証書がプリント可能です。

■団体受講に対応。充実の管理機能

個人受講のほか、複数名の一括申込に対応しています。受講者の進捗状況をチェックしメールで受講促進する機能もあり、団体単位で修了率向上を目指すことができます。

このワードで検索！

JSPS 研究倫理



研究倫理eラーニングは
どなたでも無料で受講できます。



Research Integrity

研究公正ポータル

各大学・機関の研究倫理教育担当者、
研究者、学生、研究支援者の皆様へ

研究公正のみちしるべ ～研究公正に関する情報を提供～

- 研究倫理教育教材の普及等により、公正な研究活動を推進します
- 継続的・自律的な研究公正の取組を促進します
- 実効性の高い研究倫理教育とするための支援をします
- 一人一人の多様な幸せ (well-being) と課題への挑戦を実現する教育・人材育成を支援します

未来社会共創に資する人材の育成につながる
研究倫理啓発コンテンツを国内外に発信しています



ガイドライン・指針

調査・研究

教材

イベント情報やレポート

各大学等の取組状況

各学会の取組状況

https://www.jst.go.jp/kousei_p/



国立研究開発法人
科学技術振興機構
Japan Science and Technology Agency

お問い合わせ

国立研究開発法人科学技術振興機構 研究公正課
電話: 03-5214-8390 FAX: 03-5214-8393
e-mail: rcr-kousyu@jst.go.jp

このポータルサイトは、研究公正推進事業の一環として、日本学術振興会、日本医療研究開発機構、新エネルギー・産業技術総合開発機構、および生物系特定産業技術研究支援センターと連携して科学技術振興機構が運営しています。



JST 研究倫理教育映像教材
倫理の空白
 理工学研究室

2つの視点から語る1つの研究不正

ストーリー

秀和大学（架空）理工学部の小沼研究室では、民間企業との共同研究プロジェクトとして、ブレイン・マシン・インタフェース（BMI）技術の研究開発を進めています。
 このプロジェクトの中心的役割を担っているのが、准教授の瀬川。助教の丸山と博士課程の学生の笹山が中心となって瀬川を支えますが、なかなか望まれる実験データを得られません。共同研究企業からの期待、研究成果の創出…さまざまなプレッシャーにさらされながら、共同研究企業への発表会が近づいてきます。そのような中で丸山と笹山がとった行動は…。研究者のあるべき姿を考えます。



教材の活用方法

ドラマの視聴とディスカッションを組み合わせたワークショップやグループワークで活用することが効果的です。
 大学における講義、研究機関での講習などさまざまなシーンで使用することも可能です。

＜※本教材の視聴時間＞
 准教授編：約33分
 学生・若手研究者編：約33分



研究公正ポータルにて公開中！

＜公開サイト＞

「倫理の空白」はこちらからご覧ください。

https://www.jst.go.jp/kousei_p/measuretutorial/mt_movie.html



科学技術振興機構
 Japan Science and Technology Agency

＜お問合せ＞

国立研究開発法人科学技術振興機構

法務・コンプライアンス部 研究公正課

TEL: 03-5214-8390 E-mail: rcr-kousyu@jst.go.jp



2つのストーリーで描かれる
 それぞれの盗用

JST研究倫理教育映像教材

倫理の空白II

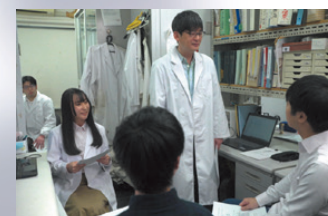
盗用

倫理の空白II

盗用

人文・社会科学編

学生時代から、PCのコピー&ペーストや安易な文献参照行為を繰り返してきた主人公の阿部優子。大学院の研究生生活を経て、准教授に就任しますが、ついに、自身の論文に“盗用疑惑”が生じます。



ある理工学部研究室の複数の研究者に“盗用疑惑”が生じます。不正調査委員会における証言などを通じ、それぞれの登場人物が、自身の研究行為を回想します。

倫理の空白II

盗用

自然科学編

ドラマの視聴とディスカッションを組み合わせたワークショップやグループワークで活用することが効果的です。大学における講義、研究機関での講習などさまざまなシーンで使用することも可能です。

＜本教材の視聴時間＞ ■ 人文・社会科学編 約26分
 ■ 自然科学編 約33分

研究公正ポータルにて公開中！



国立研究開発法人
科学技術振興機構
 Japan Science and Technology Agency

＜公開サイト＞ 倫理の空白はこちらのサイトからご覧ください。
https://www.jst.go.jp/kousei_p/measuretutorial/mt_movie.html

＜お問合せ＞
 国立研究開発法人科学技術振興機構
 法務・コンプライアンス部 研究公正課
 TEL: 03-5214-8390 E-mail: rcr-elzo@jst.go.jp



日本医療研究開発機構(AMED)は、研究公正推進のため、 様々なネットワーク・教材等を用意しています



事例から学ぶ公正な研究活動 ～気づき、学びのためのケースブック～



実際の不正行為等の事例に
基づいて、個々の事例への
適切な対応方法について
考えるための教育教材です。

ディスカッション形式の
研究倫理教育に
お役立てください！



←ダウンロードはこちらからどうぞ！

RIOネットワーク



研究機関の研究者や研究公正関係者への
情報発信を行うとともに、連携を推進して
います。

RIOネットワークマガジン

研究倫理や研究公正に関する情報をお
届けしています。
隔週水曜日に配信しています。



←こちらより是非ご登録ください！

AMED 研究公正・社会共創課

是非ご活用ください！



ヒヤリ・ハット集

不適切な研究行為をするのを
思いとどまった例や、
周囲に指摘されて
不正をせずに済んだ例を
まとめた事例集です。

ディスカッション形式の
研究倫理教育に
お役立てください！



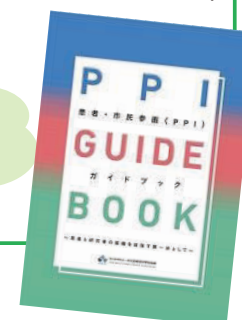
←ダウンロードはこちらからどうぞ！

患者・市民参画(PPI) ガイドブック



AMEDは、医療研究開発プロセスにおいて
研究者が患者・市民の知見を取り入れる
PPI(Patient and Public Involvement)
の取組を推進しています。

社会との対話という
観点からの
研究倫理教育に
お役立てください！



←ダウンロードはこちらからどうぞ！

日本医療研究開発機構 研究公正高度化モデル開発支援事業

本事業で開発された教材は、効率よく重要ポイントを押さえられるeラーニングとしてシステム化し、提供しています。

医系国際誌が規範とする研究の信頼性にかかる倫理教育プログラム 「AMED支援 国際誌プロジェクト」開発教材

撤回に至る論文を生み出さないためには、時代に合わせて刷新される国際誌の投稿規程を時差なく理解することが必要です。本教材では、国際誌が近年、投稿規程を通じて強く求めている再現性・客観性・信頼性確保の方法を概説します。

単 元 一 覧

データシェアリング	多変量解析
研究のモニタリング	線形回帰モデル
データの管理	ロジスティック回帰モデル
データのモニタリング	生存時間解析
画像操作の制限	比例ハザード回帰モデル
研究の再現性の適正な表現と信頼性	無作為化
国際誌が求める統計:チェックリストの活用	利益相反の開示と管理
正しいデータの記述の仕方	研究対象者の保護
記述統計量とグラフの描き方	動物を用いた研究論文: 国際学術誌の投稿規定とARRIVEガイドライン
検定とP値:統計的エビデンスとは	デュアルユース:研究がもたらす影響の多様性
多重性の問題:研究計画の重要性	著者の資格・権利・責任と盗用: 医学・生命科学系国際学術誌の投稿規定
症例数の設計:信頼できるエビデンスを得るために 症例数は計画時に必ず決めておく	著作権と出版前の発表の制限
検定の選び方:検定は結論を変え得る! 不適切な検定を故意に選ぶのは不正行為	

医生命科学系学会の学会員研究倫理素養の均てん化に向けた学修機会の提供 「AMED支援 研究者皆学修プロジェクト」開発教材

研究倫理学修の機会を十分に確保することの難しい研究者を対象に、研究不正(FFP)や疑わしい行為(QRP)を
避け、「医学の進歩に貢献する」という医学研究者としての基本的責任を再認識しそのためのツールを確保し
て頂くことを目的として、研究倫理に関するeラーニング教材を開発し配信しています。

単 元 一 覧

医学研究者の責務<一般病院勤務医>	人を対象とする医学系研究に関する倫理・法律と指針 I <一般病院勤務医>
研究における不正行為<一般病院勤務医>	人を対象とする医学系研究に関する倫理・法律と指針 II <一般病院勤務医>
盗用と見なされる行為<一般病院勤務医>	人を対象としたゲノム・遺伝子解析研究 <一般病院勤務医>
オーサーシップ 著者となる資格と、伴う責任 <一般病院勤務医>	実験動物の扱い<一般病院勤務医>
ピア・レビュー<一般病院勤務医>	正しい統計解析手法<一般病院勤務医>
利益相反状態とは<一般病院勤務医>	高い再現性を目指す義務<一般病院勤務医>
メンタリング<一般病院勤務医>	研究安全対策<一般病院勤務医>

お問い合わせ:

一般財団法人 公正研究推進協会 事務局

TEL : 03-5937-0900 Email : admin[at]aprin.or.jp
※ [at]は@に変換してください。

利益相反管理に関する理解と知識の充実を目指した 教育プログラム（研修教材）の開発と普及

研究代表者 国立大学法人東京医科歯科大学 オープンイノベーションセンター
教授 飯田香緒里



これだけ
知っていれば
安心！

医学系研究における利益相反管理

分かりにくく複雑な医学系研究における利益相反管理を
体系的に学べる教育プログラムが完成

体系化された
十分な内容

画像中心で
わかりやすい

実事例クイズで
理解度確認

音声
倍速
速聞き

(学習画面)

正解して
次の問題へ

(クイズ画面)

受講
完了の証

(修了証画面)

▼ eラーニングおよび補助教材の一覧

対象者	教材	提供形態	言語
公的研究費 を用いる医学系研究者	利益相反「基礎編」	eL	日・英
臨床研究 を行う医学系研究者	利益相反「臨床研究編」	eL	日・英
	臨床研究法にかかる様式 記載方法	eL 動画 マニュアル	日 日
COI委員会 委員・事務局	利益相反に関わる委員・事務 局向け教材	eL	日

▼ 利益相反マニュアル

対象者	教材	提供形態	言語
研究リーダー	利益相反マニュアル (フロチャート、チェックリスト)	冊子	日

ウェブページにて公開中
https://www.amed.go.jp/kenkyu_kousei/kaihatsusien_jigyo_01.html
 (各研究機関でご活用ください！)



AMED研究公正高度化モデル開発支援事業
 医学研究の開発における質の高い倫理審査を支える専門職
 の養成、ネットワーク構築、および研究者支援体制の開発

倫理審査委員向け

倫理研修用 動画教材を 提供します

倫理審査に必要な研究を実施するうえで遵守すべき事項や、
研究実施に必要な手続きなどを分かりやすく解説しています

[https://www.ims.u-tokyo.ac.jp/bioethics/
rec-education/index.html](https://www.ims.u-tokyo.ac.jp/bioethics/rec-education/index.html)



質の高い倫理審査を目指して

「質の高い倫理審査を行うためには、
倫理審査委員への教育・研修がとて
も重要」一分かっていても、マンパ
ワーや財源の関係上、教育・研修を
継続的に委員に提供することは難し
い、というのが多くの機関の悩みで
はないでしょうか？

私たちは、全国の研究機関で、手軽
に活用していただける倫理審査
委員向け及び研究者向けの倫理研
修用動画教材を開発し、Web公開
しています。貴機関における教育・
研修に是非お役立て下さい!!



人を対象とする医学系研究を行う

研究者のための 倫理研修用 動画教材提供サイト

研究者に必ず知っていただきたい内
容を中心に構成し、また、研究者が誤
解しそうなポイントについても適宜
説明しています



公開中

- テーマ1:倫理審査委員会の必要性和倫理審査委員の役割
- テーマ2:倫理審査のポイント
- テーマ3:介入・侵襲とは
- テーマ4:臨床試験の基礎知識①—臨床試験の必要性和目的—
- テーマ5:臨床試験の基礎知識②—質の高いデータとは—
- テーマ6:臨床試験の基礎知識③—研究デザイン—
- テーマ7(番外編):臨床研究法の概要
- テーマ8:インフォームド・コンセントに関する審査ポイント①
—研究対象者への説明について—
- テーマ9:インフォームド・コンセントに関する審査ポイント②
—研究対象者の自由意思に基づく判断・決定—
- テーマ10:インフォームド・コンセントに関する審査ポイント③
—ICの方法、「既存試料・情報」の概念、ICの手続き(新規試料・情報)—
- テーマ11:インフォームド・コンセントに関する審査ポイント④
—ICの手続き(既存試料・情報を用いて研究を実施する場合)—
- テーマ12:個人情報の取扱い
- テーマ13:「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する
倫理指針」の概要と審査ポイント

- Module1:臨床研究法①
—臨床研究法が適用される研究の範囲—
- Module2:臨床研究法②
—特定臨床研究実施のための手続き—
- Module3:「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する
倫理指針」のポイント
- Module3:Important Points Regarding the “Ethical
Guidelines for Medical and Biological
Research Involving Human Subjects”
 <番外編>ヒト受精卵に遺伝情報改変技術等を用いる研究に
関する倫理指針の概要

REC EDUCATION事務局

東京大学医科学研究所 生命倫理研究分野
 〒108-8639 港区白金台4-6-1 1号館3階
 Email: b-ethics@ims.u-tokyo.ac.jp

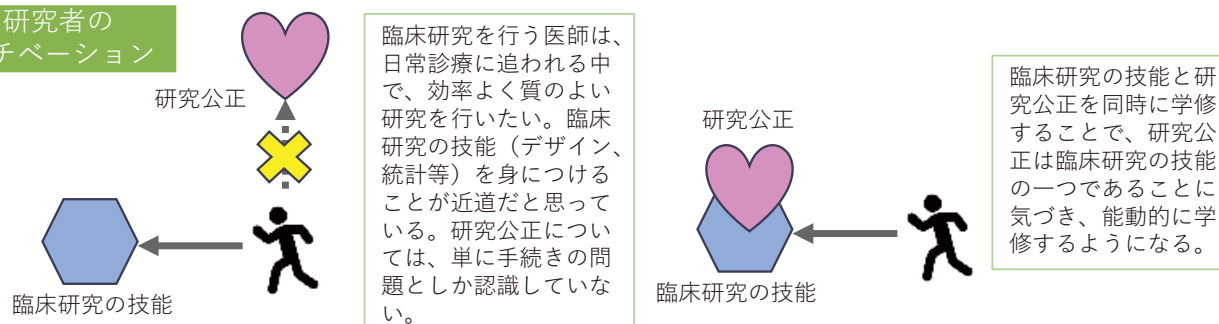


研究公正高度化モデル開発支援事業 兵庫医科大学森本班 「臨床研究者による活用を目指した 臨床研究技能と研究公正の統合学修の実用化」

開発の背景 現状の課題

- ✓ 研究公正の学習が受動的である
(モチベーションが低い。手続きの問題としか認識していない)
- ✓ その原因として・・・
 - ・一方向教育(講義、e-learning等)が中心となっている
 - ・研究公正・倫理のみ単独での学習である
 - ・内容が研究者の研究内容と合致していない(人文学研究者、実験系研究者、臨床研究者等)

研究者の モチベーション



研究の技能と研究公正は、質の高い研究を行うための車の両輪

・研究デザイン
・利益相反(COI)
・研究への患者・市民参画(PPI)
・質問紙を使う研究
・多変量解析
など

・研究デザインは適切か？
・COIのある研究の信頼性を高めるには？
・研究に患者の意見を適切に取り入れるには？
・回答者にバイアスはないか？
・意図的な解析になっていないか？

開発コンテンツ の内容

講義動画
の視聴

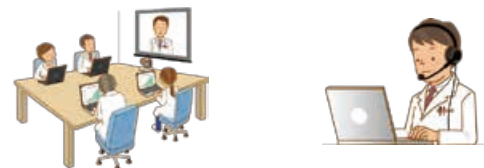
臨床研究の技能

研究公正

事例の
検討

開発のポイント

- モジュール単位の学修
- e-learningによる学修
- ✓忙しい医師でも時間を作りやすい
- ✓興味のあるモジュールから学修できる
- ✓個人でも、グループでも学修できる



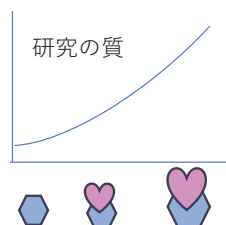
お問い合わせ：兵庫医科大学 臨床疫学
mail: resws@hyo-med.ac.jp

開発の展望

普及

- ・研究機関、病院での教育教材として
- ・学会等での教育カリキュラム、認定制度のコンテンツとして

展望



技能だけの学習から、研究公正を同時に学修することで研究の質が高まり、双方の学修を高めることで研究の質はさらに高まる

一つ一つの臨床研究の質が高まり、社会に責任ある研究として還元できる



AMED研究公正高度化モデル開発支援事業に基づく

研究倫理準専門家(研究倫理コンサルタント・初級者)養成



パイロット研修会の概要

AMEDの研究公正高度化モデル開発支援事業(第三期)の松井班では、人を対象とする医学系研究に内在する倫理的課題を発見し、自力で問題を分析し、ある程度妥当な行動選択を研究実施者に対して助言・推奨できる能力を有した研究倫理準専門(研究倫理コンサルタント・初級者)を養成することを目的とした研修会を開催しています。

【受講対象者】

(1)医療倫理・生命倫理一般について、ある程度の基礎知識・経験のある方(特に、被験者保護を主とする研究倫理の基本原則、目的等について、ある程度の予備知識を有するか、基礎教育を受けている方が望ましい)

(2)所属施設等において、今後、研究倫理に関する相談(コンサルテーション)及び研究倫理教育を担当する可能性、又は、担当希望がある方

【講師】

松井 健志(国立がん研究センター 生命倫理・医事法研究部・部長)
山本圭一郎(国立国際医療研究センター 臨床研究統括部・部長)
高野 忠夫(東北大学病院 臨床研究監理センター・特任教授)
武智 研志(松山大学 薬学部医療薬学科医薬情報解析学研究室・准教授)
渡邊 達也(北里大学 医学部附属臨床研究センター企画開発部門・講師)
他、AMED研究公正・松井班研究開発協力者

【受講料】 無料

【日程】今年度は、2024年2月9日～10日に開催

次年度は、6月頃に開催予定

* 研修会の詳細は、下記のホームページから、
研究倫理セミナー/1-コンサルタント初級者養成研修会
をご覧ください。

<https://sites.google.com/view/researchethicsjapan/>

倫理審査を支える
事務職の方のための
使える!資格



CReP 倫理審査専門職 認定制度

Certified Research Ethics Committee Professionals

(略称：CReP、シーレップ)は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) 研究公正高度化モデル開発支援事業 (第1期：平成28年度～平成30年度、第2期：令和元年度～3年度)で確立した倫理審査専門職認定制度です。現在全国で200名以上がCRePの認定を受け、アカデミアや病院、企業の倫理審査委員会運営事務局や支援部局等のさまざまな場で、倫理審査のプロフェッショナルとして活躍しています。

CReP認定者だけが参加できる毎月のweb座談会は、倫理関係の最新情報のミニレクチャーがあったり、他の機関で普段どんな対応をされているかを知ったり、疑問点も共有できるので、大変勉強になっています!

CReP認定者の声

指針改正の時の「ここがわからない!」とか、最近の「今さら聞けない」みたいな座談会のテーマは助かります。自分の知識不足な点が見えて、今後の調べ物の足掛かりにもなるので、学びが多いと感じています。ちょっとした疑問を専用スプレッドシートや掲示板でいつでも質問できるのもCRePならではの良さです。

次回認定試験は、2024年6月頃に情報公開の予定です。試験の詳細やCRePに関する最新情報はCRePwebサイトでご確認ください。



【お問い合わせ先】

倫理審査専門職CReP協会

(東京医科歯科大学 生命倫理研究センター内事務局)

☎03-5803-4085

✉office@crep-edu.jp



How to disseminate medical research results in an easy-to-understand manner



医学系研究をわかりやすく 伝えるための手引き



医療情報をわかりやすく発信するプロジェクト

研究者や医療関係者、一般の人の間の研究に関する理解のギャップを減らす

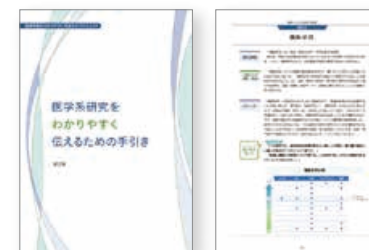
医学系研究者が研究発表等の情報を、科学的な根拠に基づき正しく発信するためのプロジェクトです。

1 エビデンスに基づいた手引きの作成と改訂

手引き

臨床応用を目指す医学系研究では、一般の方の協力を要することがあるため、研究内容をわかりやすく情報発信するための「ノウハウの体系化」と「人材の育成」が求められます。本プロジェクトでは、プレスリリースでの情報発信を想定した手引きを作成しています。

手引きは、研究をわかりやすく伝えるための「チェックリスト」と、医学系研究を理解するための「用語の解説」で構成されています。チェックリストは国内外の文献レビューを基に作成し、用語は新聞記事や専門記事等をデータベース化し、統計・言語学的手法で重要用語を抽出しました。さらに約3千名のアンケートの結果を踏まえた上で、さまざまな専門領域の専門家と協議を重ね、用語の解説と具体的な言い換えを提案しています。また、データを基に一般と専門家で捉え方が違う用語の解説を加えるなど、定期的な改訂を目指しています。



2 教育資料・一般向けのリーフレット作成

教育資料

手引きを基とした教育資料には、研究者向けの動画と一般向けのリーフレットがあります。動画は2種類あり、一つはキャラクターを用いたアニメーションを使い、チェックリスト「基礎編」「実践編」を紹介しています。もう一つは、特に注意すべき用語を専門家の講義形式で解説しています。

一般向けリーフレットは、医学系研究の記事を発信する可能性はあるが医療専門ではないメディアなどを対象としたもので、医学系研究を取り上げる際に最低限知っておいてほしいことをまとめています。



3 ワークショップ開催と患者・市民参画

普及啓発

普及・啓発として手引きを用いたワークショップを開催しています。ワークショップでは実際に手引きを用いて読みにくいプレスリリースを改善し、小グループで話し合うことでわかりやすい発信の実践につなげます。

また、手引きの作成・改訂は患者・市民参画(PPI: Patient and Public Involvement)の理念に基づき、一般の方とグループディスカッションを行い、その内容を反映させています。教育機関等でのワークショップ開催のご相談は <https://ez2understand.ifi.u-tokyo.ac.jp/contact/> からお願いします。



医学系研究 手引き



このプロジェクトは国立研究開発法人日本医療研究開発機構(令和3-4年度)で進められたものです。

東京大学未来ビジョン研究センター
Institute for Future Initiatives

埼玉県立大学
SAITAMA PREFECTURAL UNIVERSITY

- 1 すべての共著者が確認を！
- 2 データのチェックを確実に！
- 3 データや成果の取り扱いに注意！



MEMO

Handwriting practice lines consisting of 24 horizontal dotted lines.

